

## 顔とコミュニケーション

### II. 発達と顔

臺 利 夫

## Face and Communication

### II. Development and Face

Toshio Utena

Facial expressions are conceived as a focus of situation in which people encounter others. The assessment of stages in psycho-social development may be well based on change of facial behaviors of infants. The 3-months-old combines babbling with facial behaviors related to some aspects of the physical and social environment. The first opportunity for an infant to manifest comprehension of referential facial expressions is the moment when it can look its mother in the face. The mother leans on and smiles at her infant to monitor the laughing of the infant. It seems to be that the infant's laugh is based on the identification with its mother and the mother's laugh is imitated by her infant.

The cognition of the mother's face may evolve into the physiognomic perception and then the more differentiated perception of the environment. The cognitive processes in infants are not independent of social competence and on the other hand, they are strongly influenced by family, intimate individual and social experience.

The drawing of human face drawn by a child is based on the image to parents. The image happens within a relationship to parents in daily life and has a certain meaning for the child which is presented in the drawing.

#### 1. 乳児の表情

出会いが真に出会いとしての意味をもつのは、そのように受けとめることのできる自我が芽生える青年期においてである。しかし当人の意識を超えて人生そのものの発展を促す出会いまで目を向けるなら、それは新生児の時から始まっ

ていると言える。これを子どもの顔と表情の変化を軸に顧みてみよう。

まず表情変化の様相を概観してみよう。乳児の場合、情緒の表現は最初は表情のみならず身体全体の興奮として認められるが、3カ月を過ぎる頃から快・不快の分化が始まり、6カ月になれば怒り・謙悪・恐怖など、12カ月で愛情・

嫉妬などの情緒も表れ、基本的情緒の表出形態が終わるとされている。しかしこの分化の過程でも外的な刺激が同時に作用している。泣きわめきの中で怒りと恐怖を見分けて別個の反応をする母親の存在、快感を示すとさらにそれを促す周囲の人々のはたらきかけが一つの条件になっている。

誕生から満1歳までとされる乳児期の主要課題は母親との信頼関係の形成と自律性の芽生えである。この一年は、母親の温かい愛情に包まれて育つことが何よりも大切であり、皮膚と皮膚の接触でその愛情が具体的に表されることが必要である。これによって培われる信頼関係はその後の子どもの人格発達にとっても重要な意味をもつであろう。

乳児はまず母親にまなざしを向ける。抱かれながら母親と互に見合っている。動くものがまなざされるのは生後1カ月ぐらいからであるというが、肌と肌を触れ合っている母親の目の動きがその前提になっているだろう。3カ月にもなると明らかに相手に応じて微笑するようになるがそのベースは母親の微笑の反射的な模倣だろう。よく言われる舌出しの模倣と同様な状況である。興味深いのは、最初に動くものがまなざされるとしてもその動くものから母親という特定の人物—ある意味ではモノの面をもつ常態的—静止的な対象が引き出されてくることである。

5カ月にもなると手をのばして物に触れることで物への認知が発展してくる。そしてほぼ一年を経て歩行が始まるとさらに周囲の事物への関わりが増大してくるし、視力も一段と発達してその子なりの世界が次第に明瞭になってくる。また6カ月頃からは単に母親や周囲のはたらきかけばかりでなく、乳児の側からの身体ごとの動きと発声と相手の顔へのまなざしとが共応して行われるようになり、明らかに自発的な動作が目につくようになる。

10カ月にもなれば乳児同士の間でも横の関係のみでなく上下関係のやりとりも可能になるという。

2歳以後の幼児期の情緒の特徴は興奮しやすく冷めやすいということである。しばしば痙攣

を起す子どもも見出だされる。しかし5歳になると成人に見られる情緒の基本型が出揃うようである。恐怖心をもつことは乳児期より多いが、これは知能の発達による前もっての危険を感じる能力と関係があるだろう。しかし年齢とともに恐れは漸減する。以前に恐れたものを恐れなくなるのは成人の指導による面が大きい、成人(とくに母親)の態度で不必要ないしは過剰な恐れを抱くこともあるから注意が要る。

児童期になると情緒の表出の仕方のみならず表出の原因になる刺激の種類も幼児期と違ってくる。たとえば怒りに関してみると、乳児期の全身的表出行動から個々の情緒表現にともなう特定の形の表出に移る幼児期を経てさらに局所的な表現になり、単に顔をしかめるとか睨みつけるなど変わってくる。相手に対する直接的な身体的攻撃も減って言葉を用いて悪口を投げ合うようになる。これは幼児的行動を恥とする自我の発達に負うものである。ただしこれは場面によって差異があり、家庭での兄弟喧嘩では小学校高学年まで手をあげることがある。また怒りを発する原因も身体攻撃や直接的な眼前の人物からの悪口などばかりでなく間接的な噂話や社会的記事にまで拡大してゆく。こうして青年期・成人期に至れば、社会的知識と自我意識・自我統御力は一段と高まり、怒りを感じても顔には表さないということになるのである。

以上の概略の発達経過を踏まえながら子どもの顔面の動きの推移を一層細かくとらえてみよう。顔の表情に注目しながら、それを含みさまざまな身体活動=身振りについて考えるのは幼児の心理のみならず成人の心理にとっても有意義である。成人の示す非言語的行動の中に乳児期から児童期にかけて形成された身振りの痕跡が認められること、むしろそれらが基盤となって成人の行動が現れているからである。実は従来からこの種の乳幼児・児童心理学的研究は数多く見出だせるが、とくにここでは子どもの顔や表情の変化が他の身振り、その子のおかれた状況、そして対人関係と密接に関連する点を中心に記述してゆく。

新生児に見られる出生直後の微笑反応は外からの刺激なしに自発するとされているが、3カ

月頃になると母親の笑顔を見るという、視覚刺激に対して明らかにしかも頻繁に微笑を示すようになる。そして高橋(1973)によると、顔の絵のモデルに対しても、目、鼻、口と正しい位置のものには最も良く反応して微笑むという。しかしこのような過程も自発反応の時期からの母親の側からの絶えざるまなざしや笑いかげが潜在的刺激としてはたらいっていることによるであろう。そしてこの関係は母と乳児をめぐる諸他の人間関係、例えば同胞の間でも見られる。ある3カ月児は4歳の姉が周囲で友達と飴をしゃぶっている時に涎をたらしたが、翌日、友達なしの場で飴もしゃぶらず、姉が顔を寄せてきた際に涎を出したのである。これは顔だけが単に条件刺激になったというよりその乳児と姉の日頃の関係が素地になっていたといえるだろう。顔はとくにそうした全状況の象徴的役割を果たすようだ。実際、乳児の顔面の動きと認知と外界への関わりの間にはどれが先でどれが後といえないような相互作用が生じているのである。この状況はさらに児童期になってからも影響を与えている。大山(1992)によれば、5歳6カ月程の子どもについて顔写真を用いての再認の研究では笑顔の表情で提示すると再認率が向上し、これは顔の既知性や提示方向に無関係であったという。笑顔から受ける印象は人物の人格的な側面を推測させるからだろうと大山は解釈している。

ところで、従来の研究からFeyereisen, P. & Lannoy, J-D. (1991)は乳児と母親のまなざしのやりとりを次のようにまとめている。初めに母親が乳児のまなざしの方向についてゆき、それに追従するように乳児が母親のまなざす方向へ身体を向ける。これは2カ月から4カ月の頃の子どもの一部に生じるが、1年になるとすべての子どもが母親のまなざす方向をまなざすようになる。この過程の最初の段階では母親は乳児の顔を覗き込むようにかがんだりして子どもの動きをモニターする姿勢をとるのである。実際、この頃の乳児ではまだ視野が限られていて、その範囲で母親のまなざしについてゆけるのである。

未知の人の認知は6カ月で生じ、人見知り

8カ月で始まるとされているが、これにも2カ月頃からの自分の手や身体への注意から母親の身体への注意への移行が前提になっている。すなわち母親に抱かれ、母親と皮膚的に接触している間に、自分の身体へのまなざしが母親へのそれへと移り、母親の身体の動きと分離の場で他者を認めるようになるのは極く自然な成り行きだろう。滝浦(1978)は自己の身体の意識の中に「<おのれに対して外側から視点をとること>が胚胎し、それによって同時に自他の触覚的癒合性が破れ、他人がまさに他者として視覚的に知られることにもなるのである」と述べている。

しかしこの年齢段階においては真に他者や他の物を客観視できるわけではなく、他方ではいぜんとして自他の未分化が続いている点にも併せて留意しなければならない。2歳頃から始まるとされる相貌知覚についても、乳児期において玩具を舐めることで物の形状を認知するという感覚的な行動とのつながりが推定される。乳児期では四角なおしゃぶりに慣れれば、おしゃぶりは四角なものとして認知して丸なおしゃぶりを拒む場合があるように、外界の物との関わりにおける自己の感覚運動のありようがそのまま物の意味や特性になるわけだが、これは幼児期になって横に倒れたコップは自分が横に寝ることとまさにリアルに捉えられて「コップがくたびれて可哀そう……」になるといえるだろう。

上記のごとく相貌知覚とは事物を客観的に見ないで主観のままに捉えることである。周囲の世界があたかも生命をもっているかのように知覚するのである。これを原始人のアニミズムになぞらえることもある。だがこうした知覚もその成立過程を推理すると母親との関係が基盤になっているようにみえる。乳児にとって母親がすべてであり、母親は自分であり、世界であり、母の顔は世界の顔であった。もし世界の顔が母親の顔であるなら、やがて子どもが自分の回りの環境に注意を向けるようになった時、そこに“顔”を見るのも成り行きである。

もし十分に母親の顔が乳児の心に定着していたなら、それは両者の間にしっかりとした関係が成立していたことを裏書きしている。乳児は

母親の顔のイメージとともにこの関係をその存在の全体で受け止めたはずである。こうして幼児がある状況に置かれ、関わった時、おそらく当の状況を“顔”として直観的に受け止め、状況が自分を拒むように“怒っている”か、差し招くように“笑っている”かがわかるだろう。このようにしてその場の関係を具体的にはっきりと把握できることはその子の発達にとって意味があることなのだ。一例をあげよう。雨上がりの午後、2歳になったばかりの子どもが近所の郵便ポストまで葉書を出しに行く父親についていった。ポストまでの途中に小公園があり、その子のお気に入りの滑り台がある。以前に同様なことがあった時、滑り台にへばりついてしまっただけで父親が困ったことがあった。ところがその日は公園の前までくると、その子は園内をチラッと見ながら、回らない舌で「滑り台さんがビシッビシッしているからダ～メ」と自分で言いながら通り過ぎて行った。このような子どもの関係把握は父親はそれまで気づかなかったことだった。この子は自分と滑り台の間柄に絡む所与の状況をおそらく“顔—表情”を見るようにまたたく間に全体的に掴んだのである。こうした理解の仕方はこの時期までは認められなかった。かような関係把握の度合いが母子関係を素地にするとすれば、それは字を機械的に覚えるとか機械的な記憶が良いとかいう以上に発達の指標として大切なことだろう。ボタンを押すと何時何分と発声する、文字板もない音声パターン自動合成システムの時計では、その時刻を記憶・復唱できない3歳児も、日常の生活の中で母親が「もう6時15分なのね」と言えば同じように反復できるのである。

## 2. 顔の認知と描画

幼児が絵らしきものとして描き出した顔はまず母親の顔であり、父親の顔である。これは乳児期における、母親の微笑に応じて微笑する表出行動と本質的につながっていると言える。乳児の微笑は子どもが母親と関係を共有する場で生じていたが、これも第三者の観察からすれば模倣になぞらえうるだろう。この意味で模倣という用語を使うなら、母親の顔を描き始めるの

も、母親の顔の写実ではなくて模倣として描き出されるのである。この過程をWerner, H. & Kaplan, B. (1974)の解説にしたがってまとめると次のようになる。

描画による表出以前に身振りによる描出行動がある。例えばWernerの2歳9カ月の甥は河岸に繋がれた船が波の上下に伴って上下する様子を、両肩を交互に上げ下げして真似たのだが、この種の＜描写的＞身振りの形成は、現実の事象をそれ自体表現的な媒体に翻訳しはじめたことを物語っている。そしていよいよ＜描画＞の段階に至っても、それはこの種の身体活動の延長上に現れるのである。描画の最も初期の形態はなぐり描きであるが、これは腕の運動を平面に投影させたものである。2歳～4歳の子どもたちについても、円を描くように指示すると、まず頬をふくらませ、それから大きな円を描くことがある。こうして、対象が丸ければ柔らかい筆使いで表されるのである。ともあれ、なぐり描きの段階から視覚内容の図面的表現の段階へ移行する過程には、目に見えたものを身振りの模倣に翻訳した上で描画するという段階があるように思われる。

描画の過程を発達に沿って追うと、むしろ幼児の描画を感覚運動パターンの活用という側面のみで貫いてみることはできないだろう。最初の段階では模倣と遊び、情緒面と知的面が渾然としていても次第に造型的意図がはっきりしてくる、しかしどの段階でも、描画を培う基底をなしているのは描写されるもの以外の、その素地をなす日常の人間関係や事物との関係であり、それに拠る行動であって、やがてこの関係や行動が描画の諸側面に表れてくる。こうなると周囲の成人にとっても描いたものがわかるようになる。

描画の時間的持続性も発達とともに伸びてゆくのである。2歳のなぐり描きを経て3歳に至れば、「これ、ママ」と対象の意味づけが行われ、そういえばそうだがと見れる程度の丸や三角が描き出されるが、この頃はまだ短時間でクレヨンを投げ出して他の遊びへと移ってしまう。だが4歳になって、丸い顔に目、鼻、口と過大・過小・不均衡はあっても一応はそれなりの位

置づけができるようになり、線描きの絵の色づけもあまりはみ出さないようになり、さらに周囲の成人が描いた絵の部分的な模倣や延滞模倣がさかんに行われるようになると描画の持続時間も急速に増大する。

幼児らしい描き方の工夫もまた日常の生活環境と十分に結びついている。猫を可愛がっている家庭で、Xマスの家族パーティを翌年の正月が明けた頃になって描いたある3歳児は、御馳走のあるテーブルを囲む、丸に目鼻の父親・母親その他の親族の傍らに、猫が寝ている布団を四角に描いてその中に尖った三角の耳と目をつけた猫を描いた。ついでその猫が猫ドアから出ていったところと称して、画用紙の布団を描いた部分を鋏でコの字に切って開けるようにして裏側にも猫を描いたのである。これには、見えないでも知ったことを描く傾向やいわゆるレントゲン描法、または立体絵本からの延滞模倣などの幼児らしい特性が絡んでいるが、環境が独特のニュアンスを与えていることが注意されよう。要するに、子どもの描画はそれ自体としてさまざまな心理・身体的諸機能の未分化な混在を示すけれども、同時に環境との未分化な関係もその行動過程に現れる。そして、これらは部分的には成人になっても残るところがあるようである。例えば、多くの右利きの人の「顔の絵」において、幼児と成人を問わず、左向きが多いという指摘（加藤、1977）から身体性との関連が示唆されるのである。

子どもの描画から子どもの遊びに触れておこう。描画も遊びの一種だが遊びでとくに注目されるのは自発性との関連である。既に乳児期からその萌芽が見られる。3カ月の乳児は唇で母親の乳首をしゃぶりながら顔は周りではしゃぐ姉（4歳）を目で追い、手は母の胸をしっかりとつまんでいる。それまでは専ら吸乳だけだったのが今や「～ながら」飲んでおり、またそれまでは単に受動的に抱かれるだけだったのが自ら母にしがみつこうようになるのである。

幼児期に至ると、女兒のおままごとや男児のゴッコ遊びは自発性の高まりの中で未来の生活への準備段階の意味と半ば現実的・半ば空想的な創造性をもつといわれている。ここでは例え

ば、男児はスーパーマンの格好をして跳ね回ることによって暫時的万能感にひたるわけだが、その際には特有のジュスチャーと表情がつくられている。そして時には夜店で買ってもらったスーパーマンのお面が当人をしてますます夢中にさせるのだが、夕べの鐘が鳴り出すと家路を急ぐ現実への立ち戻りが、役割と役割を統合する心を確実に育ててゆくのである。

### 3. 子どもを取り巻く親たち、成人たち

人間は出生するとともに小さな一つの世界を創り出すが、成長につれてそれは次第にはっきりしてきて、またどんどん大きくなっていくが、現実の世界とその子の世界がまるで互いに“入れこ”のように関わり合う有様はこどもの顔を支点にして捉えられるとともにその子の顔を見る周囲の成人の側からも押さえられる。生まれたばかりの人間の赤ん坊は親をはじめとする周囲の成人のケアなしには生存しえないから、ひ弱で無力な存在と見られやすい。だがMoreno, J. L. (1953) はこうした発想とは著しく違った立場をとっている。Morenoの思想の基本は人間における自発性のありようである。成人は機械文明のきずなにより、役割に縛られてロボットのように自発性を失っているが、赤ん坊は未来に向かって無限の可能性をもつ自発性に満ちている。さらにMorenoの自発性は単に自分から何かをすることだけでなく、他人に何かを行わせる力でもあるのだが、その意味では赤ん坊は人間関係をひとりてにつくりだすほどの自発する力を具えている。その子が生まれる前から両親や親族は大きな期待を寄せ、生まれた時から周囲の多くの成人たちの注意を一身に集めるからである。

誕生直後の新生児の顔は皺が多くて目鼻立ちも整っておらず、いわば人間らしい顔をしていないから、その赤ん坊と関係の薄い他人にとってはとくに可愛いとは思えない（お世辞には「可愛いですね」という）が、父母や租父母には本当に可愛らしく感じられて、さらには「なんて綺麗な赤ちゃんだろう」などと一人ごとを言ったりする。既に述べたように、3カ月も経って乳児が自然にしかもはっきりと微笑むよう

になると、母親や血縁の家族にはとにかく可愛くてたまらなくなる。

上述の母—子関係は誕生後一年ほど経って赤ん坊がはじめて言葉のようなものを発する際にもはたらいっている。一般に、発語以前における赤ん坊の身振りや身体活動は言葉の前駆的な表れとみなされている。この過程に母親の身振りと言葉が絡むのである。他方、Picard, M. (1948) は身振りから段階的に言葉へとたどりつけないとし、むしろ「身振りからの解放という創造的行為があらゆる子どもにおいても一度遂行される」と述べている。だがそれが一つの創造だとしても母親との関わり無しには果たされにくいものなのであり、身振りが言葉の前駆的表れであるか否かの問題はこの文脈からすれば一応傍らに置いておいてよいだろう。

幼児は、まだ言葉になっていない発声に伴って適当な吐気・吸気運動を行っている。これがまず母親の注意を引くわけで、発語の前から乳児は聞き手—初めての聞き手をもつのである。発語は両唇と舌蓋の活動に呼応するのであり、このメカニズムを基盤にして言葉は急速に発達するのだが、発声と結びついて母からの子どもの顔の凝視とかけ声、そして子ども側からは手や足をさし出して母親に近づこうとする努力がなされる。子どもの身振りはある意味で周囲の成人から言葉の習得に必要な素材を引き出していると言えよう。このような相互作用を通じて最初の一語が発せられ、以後急速に発達してゆくのである。

母親にとってもまた祖父母やその他の親族にとっても自分たちの赤ん坊の可愛らしさは特別なものである。その子の静かな寝顔を見るだけでもなにか安堵の気持ちが湧いてくる。この特別な可愛さは自分と赤ん坊の血の繋がりとという素地によるかも知れないが、心理的にはいわゆる同一視によるであろう。赤ん坊の痛みは自分自身の痛みであり、赤ん坊の快感は自分自身の快感である。笑いは元来、他人と比較した場合の自分の優越感を表しており、周りに誰もいない所で母親が自分の赤ん坊の顔を見ながら微笑むのは「私の赤ん坊は世界で一番可愛らしい」と思っていることであると述べたのは Bergson,

H. だが、こうした感情状態が子どもが成長しても変わらないとすると問題である。親と子の同一視の関係は当然子ども側の関わり方によって複雑になるわけだが、子どもの受けとり方でかなり異なる方向をとるようになる。

たとえば、子どもの顔への母親の注意が過剰になった場合、母親が子どもの自分の顔への敏感さを先取りしてしまうようなこともある。もしその子の顔にいくらかの障害があって、母親が先々の苦労を見越して心配し、たえず不安をもちながら子どもの顔をうかがうと、ひとりで子ども自身が自分の顔に過度に気遣うようになるだろう。顔のことでやがて苦労するのではないかという親の不安がそのまま子ども自身をして必要以上に顔のことで苦労するようにさせてしまうかも知れない。むしろ改善のための処置も必要だし苦労に耐えうる意志を育てることも望まれるが、つまりはこれからの子ども自身の心構えを信じる他はない。傷のあることや生来的なアザのために周囲から排斥やいじめを受けたりしないよう、多少の侮辱は問題にせぬよう、劣等感にさいなまれて自ら否定的な考え方や生き方に陥らぬよう、そうした重荷を重荷と感ずることなく元気に生き抜いてゆき、本人なりに幸せをしっかりと掴むように祈り、期待することである。

甘やかしや我がままはどのような場合も避けねばならない。子どもの欲求がそのまま母親の欲求にすり変わり、ほとんどの欲求が通るという体験を重ねた子どもは母親の気づかないうちにこの関係を利用するようになる。子ども独自の自我意識は急速に拡大し、母親とは異なる方向性をもつようになる。3歳過ぎでかなりわがままになった子どもに無策な母親が認められる。5歳にもなって、デパートで欲しいものを買ってもらえないとなるとフロアーに寝転がって横目で親の顔を見ながら泣きわめく子どもをまったく叱れない母親はその端的な例である。

青年期の問題として子どもの親離れの困難とともに親の子離れが取り上げられるが、こうした親の態度は既に幼児期に見出せると思う。母親の側からの子どもへの癒着は子どもだけが自分の人生のすべてと感じるような、子どもへの

著しい依存心に発している。こうした母親の態度は母親自身の過去体験に基づくという考え方もあるが、むしろ母親とその子の父親つまり夫婦関係に拠る場合が多い。父親の子どもへの愛情はむろんのこと、母親への愛情や思いやりが安定した関係 — 過度に癒着せず、過度に分離しない母子関係 — の素地になるであろう。

子どもにとって社会の中での生き方を父親を通じて学ぶという意味で父親は母親とは異なった役割をとる。だが主に母親との関係に終始する乳幼児期においても、父親との関係は潜在的に社会生活へのレディネスを支えるという意味をもつ。

第二次大戦前には母親が乳児を背中におぶって街を歩いている姿をしばしば見かけた。この場合、子どもは直接に母親の顔は見えないが、母の背を胸に感じて母と一体化しながら、その肩越しに街 — 世の中を見て、母とともに街路を前進したのである。こうして知らず知らずのうちに子どもは自分が社会に生きていること、母親に導かれて世の中に出立つてゆくべきことを覚えるのだという。敗戦後はこのような姿は、大都市ではとくに、ほとんど見れなくなった。母親たちは胸の前に子どもを吊り下げるかたちで抱いて動くのであるが、これは欧米的なやり方で、そのやり方がファッションとしてとり入れられたようだ。元来、欧米の親子関係は互いに独立の存在としての面が強く打ち出されているから、こうした抱き方だけを指して問題にすることはない。だが胸の前に抱いて顔を絶えず見合うことで親子の情愛の深まりとともに癒着が促されることもあるだろう。背負うやり方は、あるいは日本文化に適した自立心の培い方であったかも知れない。少なくとも戦前についてはそのように言えるだろうし、現代もそこから受け取れるものがあるだろう。

父親は子どもからするとまさにその背を見て育つべき存在である。子どもにとって母の顔と父の顔の意味は、父との関係が基本的に子どもの人生にとって対面のやりとりを主要な焦点にしている点で違っている。児童期を過ぎる頃ともなれば、父も子も顔をまともに合わすとテレてしまう。父は子にとって全体としての存

在の重みであり、顔を見合うところのやりとりで解決する問題に関わることに主な役割を負うものではない。だが「父親は現実に存在し生き生きとしているということを、子どもが十分に感じとれる程度に、姿を見せなければならない。両親がいること自体に安定できる要素がある」(Winnicott, D. W., 1964)。仕事で留守がちな父親が帰宅した時の幼児の笑顔は比べようがない。しかも弟妹の誕生で母が産院にいる間、大好きな父だけと過ごす3歳児は「もう一人足りない」と言って周囲を笑わせるのである。

「父親が子どもの人生を豊かにしていく方法は、ちょっとひと口では話せません。というのは、その可能性は、非常に広範に及んでいるからです。子どもは父親のことをじっと見ていて、子どもの目に写る、あるいは写っているものから理想の父親像を、少なくともその一部分を作り上げるのです。朝になって出かけ、夜になって帰宅する父親の仕事のようすが徐々に明らかになってくると、子どもの前には新しい世界が展開されてくるのです。」とWinnicottは言っている。

## 引用文献

Feyereisen, P. & Lannoy, J-D. : *Gesture and speech*. Cambridge. Univ. Press, N. Y., 1991.

加藤孝義：顔の描画における方向の偏向性について 日本心理学会第41回大会論文集 754 ~ 755, 1977.

Moreno, J. L. : *Who shall survive?* Beacon House, N. Y., 1953.

大山摩希子：幼児における顔の再認について 心理学研究 63巻4号 248~255, 1992.

ピカート, M. 佐野利勝(訳)：沈黙の世界 みすず書房1964 (Picard, M. : *Die Welt des Schweigen*. Eugen Rentsch, Erlenbach-Zurich, 1948)

高橋道子：顔模型に対する乳児の微笑反応・注視反応・身体的接近反応・泣きについての横断的研究 心理学研究 44巻3号 124~134, 1973.

滝浦静雄：言語と身体 岩波書店 1978

ウェルナー, H./ Kaplan, B. 柿崎祐一(監  
訳) シンボルの形成 ミネルヴァ書房 1974  
(Werner, H. & Kaplan, B. : Symbol for-  
mation. Wiley, N. Y., 1974)

ウィニコット D. W. 猪股丈二(訳): 子ども

はなせ遊ぶの 星和書店 1986 (Winnicott, D.  
W. : The child, the family, and the  
out-side world. Part II, III. Penguin  
Books, 1964)